

【テーマ】

「GIGAスクール世代はどのような教育を受けてきたのか」

【主催】教育システム分科会

活動報告

日 時：2025年8月4日（月） 14:00 -17:00
場 所：清泉女子大学 + オンライン配信（Webex）（ハイブリッド開催）
出席者：67名

1. 研究内容

今年度第一回目の教育システム分科会が清泉女子大学（東京都品川区）の会場とオンラインのハイブリッド形式で開催されました。

東京都高等学校情報教育研究会でAI活用検討委員長を務められ、メディアでもその知見を発信されている、東京都立小岩高校の椋本 哲也先生をお招きし、高校現場のICT教育の現状を詳しく解説していただきました。大学側の認識とのギャップや、新入生のICTスキルを活かすための教育方法等について議論を深め、これからの大学教育のあり方を共に考えていく機会となりました。

2. スケジュール

14:00 分科会開始
○開会挨拶

○ご講演（60分）

「高校現場から考える情報教育の未来」

東京都立小岩高校 情報科 椋本 哲也 様

○質疑応答（20分）

○休憩（10分）

○キャンパスツアー（20分）

17:00 ○グループディスカッション（40分）
○各グループより全体共有（20分）

○閉会挨拶

「GIGAスクール世代はどのような教育を受けてきたのか」

2025年8月4日（月）、教育システム分科会が清泉女子大学（東京都品川区）の会場とオンラインのハイブリッド形式で開催されました。

今回は、東京都高等学校情報教育研究会でAI活用検討委員長を務められ、メディアでもその知見を発信されている東京都立小岩高校の椋本 哲也先生をお招きし、高校現場のICT教育の現状を詳しく解説していただきました。大学側の認識とのギャップや、新入生のICTスキルを活かすための教育方法等について議論を深め、これからの大学教育のあり方を共に考えていく機会となりました。

共立女子大学の田中氏（教育システム分科会幹事）の司会で進行し、同氏が開会の挨拶をしました。次に清泉女子大学の与田氏（教育システム分科会運営委員長）が、「本日はお暑い中、会場までお越しいただきありがとうございます。GIGAスクール世代が大学に入学してきますが、実際どういった教育を受けてくるのかが、運営委員会で話題となり、今回のテーマを企画しました。今日は、先進的な取り組みをしている都立高校の先生をお招きしてお話を伺います。今回の分科会が実り多いものになれば」と挨拶され、講演に移りました。

■ご講演：

「高校現場から考える情報教育の未来」 東京都立小岩高校 情報科 椋本 哲也 氏より

○自由進度学習とカスタムAI機能を活用した主体的学びの創出

私は、情報科が新設された翌年の2004年から東京都で情報教育に携わっています。また、東京都高等学校情報研究会では、AI活用検討委員会の立ち上げに携わり、昨年まではAI研究校の指定を受け、現在は開発委員会のメンバーでもあります。

私が勤務する東京都立小岩高等学校は、生徒数が1,000名を超える大規模校です。高校入学時の偏差値は50前後で、大学進学が6～7割、専門学校が2～3割、就職が1割程度という進路状況です。本校は文部科学省のDXハイスクールに指定されており、初年度の2024年度に1,000万円の予算が割り当てられ、様々な取り組みを行いました。

東京都では、生徒用の端末としてSurface Laptop、Surface Go タブレット、iPadの3種類から学校ごとに選択できます。小岩高校では、当初はタブレット型を導入しましたが、性能面や画面の大きさから、現在はノート型のSurface Laptopを使用しています。現在、タッチタイピングができる生徒は全体の3割程度。また、クラウド利用が中心になったことで、「フォルダ」「ディレクトリ」や「ファイルを保存する」という概念が希薄になっている現状が見受けられます。授業ではOffice製品の操作を教えるのではなく、必要に応じて生徒が自発的に学ぶスタイルを採用しています。

成績管理には東京都のシステム「C4th」を使用しています。学習環境としてはMicrosoft Teamsが配布されており、多くの教員が課題配信にTeamsを利用しています。その他、採点システム「リアテンド」や欠席連絡用アプリ「Classi」、メンタルケアシステム「コンディションレポート」等、様々なシステムが導入されていますが、統一感に欠ける点が課題と言えるでしょう。

学校独自で導入しているシステムとしては、「スタディサプリ」、「マナシカ」のほか、文部科学省のDXハイスクール予算を活用して、CBT（Computer Based Testing）システムの「TAO」も導入しました。情報科の定期考査はTAO CBTを使って実施されており、今年度は、複数の教科で導入する予定です。

東京都は、昨年までは生成AIの生徒利用に最も慎重な自治体の一つでした。しかし、今年5月からは、コニカミノルタがベースを開発した「都立AI」の運用が開始され、全都立高校で生成AIが利用可能となりました。このシステムはChatGPTのAPIを利用しており、利用規約上、年齢制限がなく、同意書も不要です。現在は、AIエンジンは4o-miniで、「再学習しない」「国内サーバーでの運用」といった安全性も確保されています。

ただし、マルチモーダルには非対応で、画像入力は可能ですが、音声入力や画像出力はできません。また、Excelファイルには対応しておらず、PDF、Word、PowerPoint、テキストファイルのみが利用可能です。

探究的な学び

総合的な探究の時間

- ・「調べ学習」から「探究的な学び」へ
- ・「問い」を立て、「仮説」を作って「検証」する

生成AIの活用（思考の壁打ち）

- ・「問い」を深める
- ・「仮説」のチェック

カスタムAIの活用

- ・安易に「答え」を教えない

エージェント機能、DeepResearch

- ・人間がどこまで検証すべきか

都立AIの大きな特徴は、カスタムAI機能が利用できる点です。これは、教員があらかじめプロンプトを設定しておくことで、目的に沿ったAIとの対話を生徒が行えるというものです。例えば、「すぐに正解を教えない」といったプロンプトを設定することで、生徒が自ら思考を深めるような使い方が可能になります。これは通常、有料版のAIサービスで提供される機能であり、無料版で利用できる点は大きなメリットです。例えば生徒が自分の興味のある分野について生成AIに質問すると、授業で扱っている環境問題と関連づけた話題をAIが提案してくれます。そこから、生徒はAIと一緒に考えを深めながら研究テーマを決めていく。このように、AIをまるで先生やチューターのように活用しています。

プログラミング教育では、従来の文法中心の指導から脱却し、目的主導型の学習へと転換。生徒が自ら課題を設定し、生成AIにコードを生成させることで、要件定義の重要性やプロンプト技術の向上を図ろうとしています。

「情報I」の授業では、全国的にも珍しい「全範囲自由進度学習」を導入しています。これは、生徒が自分の興味のある単元から学習を進め、小テストや口頭試問、実習課題をこなしていくスタイルです。生徒はダッシュボードで自分の進捗状況や成績予測を確認しながら、自己調整学習を行っています。この中で生成AIは、口頭試問の問題作成のサポートや、生徒が作成した問題の質をチェックする役割を担っています。

3年生の選択科目「情報Ⅱ」のプロジェクトベース学習では、生徒が自らの興味に基づいたテーマでAIを活用しながら探究活動を行っており、その成果は目覚ましいものがあります。例えば、スポーツデータ分析のプロジェクトでは、腕時計型のGPS付き心拍計を用いて生徒の持久走データを収集し、マラソン大会の順位を予想。生徒はAIに相談しながら、回帰分析や要素分析といった専門的な手法を自ら学び、高度なデータ分析に挑戦しています。またAIを活用することで、10人以上あるチームを1人の教員で見ることができています。さらに、是非はあるかもしれませんが、本校ではAIを活用した大学等の志望理由書を作成する試みも行っています。

高校教育のデジタル化が進む中で、大学入試に情報科目を独自で取り入れられれば高校の情報教育も変わると思います。今後の入試制度の変化に注目しています。

■キャンパスツアー・グループディスカッション：

現地参加の方は、清泉女子大学のキャンパスの見学をさせていただきました。その後、3グループに分かれてグループディスカッションを行いました。グループディスカッションの様子はオンラインでも中継されました。各グループからの発表をご紹介します。

Aグループ

GIGAスクール世代の学生が大学に入学する際の懸念点として、学生の能力のばらつきや、ファイルやフォルダの概念の理解度の差が挙げられました。また、高校での情報教育が大学で途切れるケースがあることが指摘されました。AIの活用に関しては、使い方次第で有益であるとの意見があり、AIが回答できるような問題を出すべきではないという教員側の課題も共有されました。

(Bグループなし)

Cグループ

このグループでは、棕本先生の講演を受けて、「大学側も学生の多様性を想定した教育体制を構築する必要がある」と議論しました。AIについては、職員の間では業務でのAI活用が進んでいる一方で、大学教員の間ではAIへの向き合い方にばらつきがある現状が課題として指摘されました。また、ICTやAIの活用を促進するには、トップダウンでの働きかけが有効であるという意見も出ました。

Dグループ

学生間の情報スキル格差を埋めるため、英語のようにプレイスメントテストを実施し、スキルレベル別に授業のクラス分けを行うこと等が提案されました。また、多くの大学でAIに関するガイドラインの整備が不十分であり、授業での活用方法や評価基準が未整備です。大学側はインフラ整備だけでなく、中身の部分でも対応する必要があるという結論が出ました。

棕本先生からのコメント

AI利用における「ズル」の問題について、私は課題を出す教員側に課題があると思います。AIが出した答えが正しいかどうかを判断できることこそが重要であり、そこが評価の対象になるべきではないでしょうか。またAIがあれば知識が不要になるわけではなく、思考の材料として知識は不可欠です。教育の格差を縮めるために、良い実践事例を広めていく努力が必要です。

最後に、棕本先生から東京都が導入した「都立AI」のカスタム機能が紹介されました。プロンプト設計による教育的制御や、AIとの対話を通じた企画立案支援の事例です。例えば、動画制作の際のストーリー展開を提案したり、企画の倫理的検討を促したりしているそうです。AIが生徒の思考を広げたり制限したりして、チューターのような教育的役割を果たしています。

■まとめ：

結びに、共立女子大学の湯浅氏（教育システム分科会幹事）が「高校生が多様なソフトに触れている現状や、大学とのICT環境のギャップについて理解が深まり、大変勉強になりました。高校生がどのように学び、何を大学に持ち込むかを知る貴重な機会となりました」と述べ、閉会となりました。

4. 参加校 [33校44名] ・参加企業[5社23名] ・参加総数[67名]

愛知学院大学 [1] 十文字学園 [1] 関西国際大学 [2] 久留米大学 [1] 京都文教大学 [1] 共立女子大学 [4] 金城学院大学 [1] 金沢星稜大学 [1] 九州大学 [1] 芝浦工業大学 [2] 城西大学 [2] 神田外語大学 [1] 清泉女子大学 [4]	専修大学 [1] 中部大学 [1] 東海大学 [1] 東京工科大学 [1] 東京家政学院大学 [1] 東京農業大学 [1] 東京理科大学 [1] 東洋学園大学 [1] 東洋大学 [1] 二松学舎大学 [1] 文京学院大学 [1] 名古屋市立大学 [1] 名城大学 [2]	明治大学 [1] 立教大学 [1] 立正大学 [2] 麗澤大学 [1] 奈良先端科学技術大学院大学 [1] (学) つくば開成学園 [1] 東京都立小岩高等学校 [1]	チエル株式会社 [2] 東京コンピュータサービス株式会社 [3] 富士電機ITソリューション株式会社 [4] 有限会社ハーティサービス [1] 富士通Japan株式会社 [13]
--	---	--	---

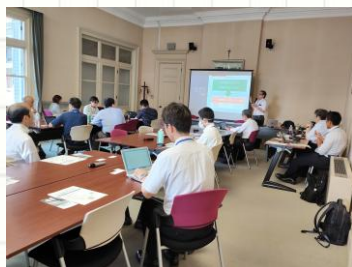
5. 所感（教育システム分科会運営委員会）

GIGAスクール構想のもとでICT教育を受けてきた世代の大学入学を迎え、彼らがどのような教育を受けてくるのか、また大学側としてどのような受け入れ体制が求められるのか等について、椋本先生の講演やグループディスカッションを通じて理解を深めることができました。

椋本先生の講演では、都立小岩高校での情報教育の事例について、生徒間におけるPCスキルの格差、Microsoft Teamsをはじめ様々なシステムを利用していること、CBTシステムによる定期考査、生成AIの活用等、具体的かつ先進的な取り組み内容をご説明いただき、非常に興味深く有意義な内容でした。

最後に、今回の分科会開催にあたり、会場をご提供いただいた清泉女子大学様、ご講演いただいた椋本先生、ご協力ありがとうございました。

【 分 科 会 の 様 子 】



【事務局より】

次頁以降に開催後アンケート結果（抜粋版）を記載しています。

開催後のアンケート結果詳細版や当日プレゼン資料ご覧になりたい方は、「[CS研・IS研情報交換サイト](#)」に掲載しておりますのでそちらをご覧ください。また、今回の分科会開催に際し事前アンケートを行っています。事前アンケート結果につきましても「[CS研・IS研情報交換サイト](#)」に掲載しております。

◆「CS研・IS研情報交換サイト」について

CS研・IS研の会員向けに情報・資料をご提供し、会員の皆様が情報交換をする会員専用のサイトです。

（サイトのご利用をご希望の方は、利用アカウント申し込みサイトにてお申込みください。）

情報交換サイトURL：

<https://csis.ufinity.jp/shared>

※利用アカウント申し込みサイトURL：<https://seminar.jp.fujitsu.com/public/seminar/view/102857>

【連絡先】

私立大学キャンパスシステム研究会 事務局

〒 212-0014 神奈川県川崎市幸区大宮町1-5 JR川崎タワー

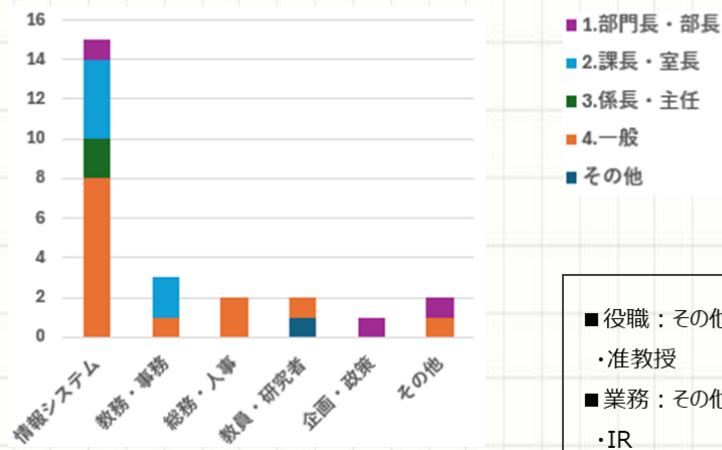
富士通Japan株式会社 ビジネス変革室内

E-mail：contact-csiken@cs.jp.fujitsu.com

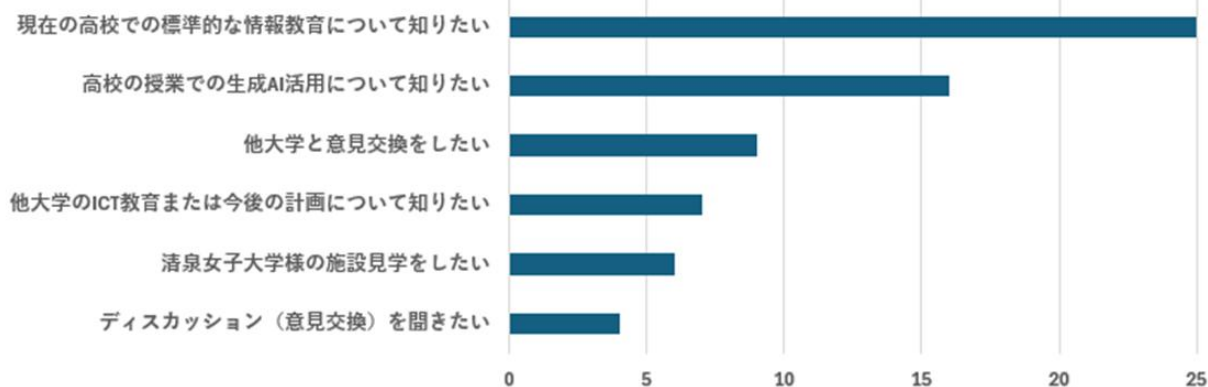
開催後アンケート結果【回答数／対象者数：25／43（大学関係者のみ）】

■ 担当業務と役職について

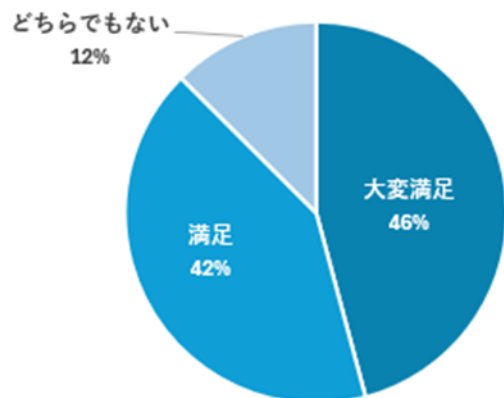
■ 担当業務と役職



■ 参加した目的について



■ 本日の分科会の全体満足度について



満足以上 : 88%
やや不満以下 : 0%

■全体満足度の評価理由について（一部省略・抜粋）

【講演内容への評価】

- 棕本先生の講演が素晴らしく、高校教育の現状という広いお話と、先生が実践されている先進的な情報教育という深いお話をバランスよく聞けて大変勉強になりました。
- 高校での情報教育の実例を聞け、とても参考になりました。
- 高校での情報教育や生成AIの活用について、一般的な事例と先進的な取り組みの双方を知ることができたため。
- 特殊な意見であると、おっしゃっておられましたが、都立高校の現状を知ることができて、(知らない用語もたくさんありました)大変勉強になりました。
- GIGAスクールの実践内容や高校で利用されているアプリケーション・AI活用について具体的な話を伺うことができ、大変参考になりました。
- 高校の情報の先生のお話を聞ける機会はそうそう無く、貴重な経験だったため。
- 高校の情報教育の現状について、教員だけでなく大学職員の方とも共有できたことがよかった。
- 小岩高校の先進的な取り組みの状況を知ることができてよかった。一般的な高校を含めた現状も知りたかった。(先生の話しの中でその一端はうかがえているが)
- 高校にて、どのような情報教育が行われているかイメージしやすかったため大変満足しました。
- 高等学校でのリアルな情報について理解できた。
- 公立高校の最新授業を知ることができた。高校も悩んでいるようなことが分かった。

【参加者間の交流（ディスカッション）への評価】

- グループワークではそれぞれの大学の様子や問題が共有され、有意義な議論が進みました。
- グループディスカッションでも様々な意見を聞けて良かったです。
- ディスカッションが盛り上がったので時間はもっと長くてよかったかもしれないが、標準的な時間は確保していただいていたと思う。

【施設見学・会場への評価】

- 清泉女子大学さまの素晴らしい建物や施設を見学できたこともあり、対面で参加できてよかったと考えます。
- 清泉女子大学さんの本館ほか、サーバ室やBYOD導入の様子を聞くことができて大変有意義でした。
- 重要文化財の中の会場ということで、ワクワクしながら参加できた。

■今後、CS研で実施してほしいイベントやテーマについて（一部省略・抜粋）

- BYOD検討・導入状況やそれに関するネットワーク整備、セキュリティ整備について
- 教育と真ん中でもよいかなと思いました。学修者本位の教育とはなにか、みたいな。
- 留学生の対応について各大学の状況を知りたい。
- 高大連携に関すること（今回のような内容を含む）
- 大学図書館の活用（そちらの分科会にもいずれ参加してみたいです）
- 生成AIの活用事例
- 各大学のシステム部門が抱えている課題及びトラブルシューティング事例

■CS研についてのご意見・ご要望について（一部省略・抜粋）

【満足・期待】

- 久々の参加でしたが、有意義でした。運営お疲れ様でした。
- 様々な企画、有益な情報提供に感謝いたします。引き続きよろしくお願いいたします。
- 初参加でしたが、事務局をはじめ運営担当のみなさまの手厚いサポートもあり、思っていたよりもアットホームな雰囲気楽しく学ぶことができました。ありがとうございました！
- 大学教員と職員と一緒に学び考えられる機会は意外と少ないため、CS研はその貴重な場として機能すると思います。今後もよろしくお願いいたします。
- 毎回、充実したテーマ設定と内容で感謝しております。このまま続けていただきたいです。

【運営方法・環境に関する改善要望】

- オンラインは手軽に参加できて良いので、会場収音等の音声コントロールが上手く行くともっと良いと感じました。
- 事前に研修当日に利用する講演の資料を提供いただければ大変助かります。上記により、事前学習が可能になり、研修当日はよりイメージしながら話を聞くことが出来るため。
- テーマの内容は大変興味深いものであったため、ディスカッションの時間がもう少し長くあればモアベターでした。